

魔法のプロジェクト2021 活動報告書

報告者氏名: 西口 知里 所属: 大阪府 茨木市立茨木小学校 記録日: 2022年 2月 8日

キーワード: スケジュール管理 人との関わり コミュニケーション

【対象児の情報】

・学年

小学6年

・障害名

知的障害を伴う自閉症

・障害と困難の内容

こちらからの声かけに対して、簡単な言葉で返答できるが、返答に困ることがある。見たり読んだりした上で考えを巡らすこと、質問に答えることは難しい。移動や準備等、身の回りのことを声かけなしで一人でやることは難しい。

・使用した機器

iPad, iPad mini, Apple Watch

【活動目的】

・当初のねらい

(1) 気持ちを表現しコミュニケーションの楽しさに気づく。

(2) 自分でスケジュール・時間割を確認して授業準備や移動ができる。

・実施期間 2021年5月～2022年2月

・実施者 西口知里(支援学級担任)

・実施者と対象児の関係 支援学級担任

【活動内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

見たり読んだりした上で考えを巡らすこと、質問に答えることは難しい。日常的に使う言葉の理解がある。表出は単語や二語文が多く、簡単な言葉で質問に返答できるが、返答に困ると意に反して「はい」と答えることもある。休み時間は通常学級の友だちと一緒に遊ぶことよりも支援学級で過ごすことを好む傾向がある。

通常学級で学習する際は周りをよく見ており、教科書の同じページを開いたり、ノートを覗き込んで書こうとしたり積極的な場面がある。ひらがな・カタカナは読み書きでき、文章が読める。濁音、半濁音、促音、長音を間違えることがある。曜日や数字の漢字は読み書きができる。

また、声をかけられるまで椅子にじっと座っていることが多く、周りとの自発的な関わりが少ない。そのため、自信や達成感が味わいにくく、本児は気持ちを表現する場面が少ない。

活動時、隣に支援者がついてることが多く、スケジュールや移動、持ち物の管理は助言を聞けるので本人は困りを感じていなかった。時間がくるとチャイムが鳴ること、次の行動に移す合図と理解できるが、支援者の声かけがなければ切り替えが難しく、一人で行動できない状況であった。

学習目標（1）について

・活動の具体的内容

〈iPad でつながる〉

学校での活動の様子や行事の写真・動画を iPad で撮影した。本児がお気に入りの写真を繰り返し見ていたので、修学旅行や運動会など、大きな行事があったあとには、お気に入りの写真を選び振り返る、言葉にする活動を取り入れた。

修学旅行の同じ班の友だちの顔を覚えるために、自分で「撮らせて。」と友だちに声をかけて、iPad で撮影した。

自発的に周りに関わる場面を増やすために、本児が楽しいと思うもの、理解しやすいルールや内容のものを中心に選び、アプリをダウンロードした。

DropStep は支援学級において対面で本児と担任でやりとりを行った。何を返信して良いか分からず、私が打ったものをそのまま返すことが多いが、画像を送るとその画像の名前を返信できるようになった。（写真1）



写真2.班行動



写真1.

Drop Step 操作

・対象児の事後の変化

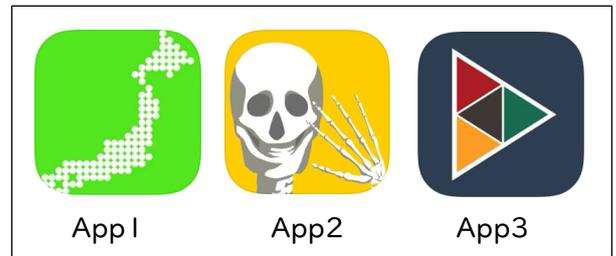
自宅で iPad を使用していることもあり、扱いは慣れていたので、写真の機能は簡単に導入できた。5 月は、写真を見せて「これ何してる？」と問いかけると、写っている自分の姿を見て、自分の名前を言うのみだった。その状態を踏まえ、イラストに示されている状況を、「りんごを たべる」と、文章化するプリント学習を行なった。2 月時点、プリント学習を繰り返す中で、撮影した写真でも補助は必要だが、文章化できることが増えている。

行事を中心に今までの活動を振り返る活動を通して、ほかの支援学級担任にお気に入りの写真を見せることもした。「これが好き?」「おもしろかった?」と声をかけてもらい喜んでいた。

修学旅行の事前準備として、同じ班の友だちを撮影させてもらい、名前を覚えることができた。修学旅行では、自分から声をかけることはなかったが、自分の班の友だちを意識し、グループから離れないように気をつけることができた。修学旅行から帰ってきて振り返りをしたときには、自分の写真を見て「修学旅行」とつぶやいたり、陶芸体験の様子の動画を繰り返しみたりしては、「せんせ」とこちらにも見せようとしてくれることもあった。（写真2）

本児に数種類のアプリを体験させる中で、パズルが得意であることがわかった。特に都道府県パズルや国旗クイズでは、誰もが出せないような高タイムを出し、「すごい」「僕もやらせて」と周りの友だちが集まってきた。本児が好きな動画を視聴しているときに友だちが覗きにくると、パズルのアプリに切り替えて遊んだり、交代してあげたりする場面も見られた。

App1:あそんでまなべる 日本地図パズル
 App2:あそんでまなべる 人体模型パズル
 App3:あそんでまなべる 国旗クイズ



学習目標（2）について

・活動の具体的内容

6月

スケジュールを見て自分で移動できるよう、はじめは1日の時間割を手持てるサイズの紙のスケジュールで渡していた。その後、Drop Talk で時間割を示すこともしたが、他の機能が気になることが多く、紙のスケジュールが本人には適している様子であった。そのため紙のスケジュールを中心に使用することにした。

7月

修学旅行の事前学習として Keynote で作ったスケジュールの確認をした。家庭からも実際に下見へ行き、写真を撮ってきてくださった。下見をしたことから当日も安心感が増した様子で、次は「ここへ行く」と確認できた。(写真3)



写真3.修学旅行スケジュール

・対象児の事後の変化

6月

時間割や1日の流れ(時間割の詳細版)を教室内に提示していたが、スケジュールとチャイムの結びつきがなかったようである。自宅では保護者の方がカレンダーを作成し、1日の流れも定着していることから、ルーティン化されれば自分で行動できると考えた。

9月

運動会の練習も始まり、毎日体育があるので、着替えや移動の声かけが常に必要であった。紙のスケジュールを見せて一緒に「3時間目は、音楽、音楽室です。西口先生とべんきょう」と確認してから行動することを繰り返した。

12月

「Aさん、今3時間目終わったよ、次何時間目？」と声をかけて指をさしながら一緒に読み上げるようにした。ふとしたときに、スケジュールをじっと見る回数が増えてきた。

1月

毎朝、本児が登校し、朝の準備が終わった後にスケジュールを渡している。ある朝、私が手に持っていたスケジュールを無言で取ろうとするので、「どうぞ」—「ありがと」とやりとりの練習をした。スケジュールを朝に受け取ることが自分のルーティンに入ってきた。その後は、「せんせ、(スケジュール)ちょうだい、ありがと」と自分から話しかけるようになった。また、「これで2時間目の学習を終わります」とあいさつをした後、声かけなしで「3時間目、社会、6年〇組。西口先生とべんきょう」とつぶやき一人で教室へ戻ることができた。(写真4)

2月

朝、わざと何も書いていないスケジュールを渡してみた。すると、私の手を持って「せんせ!!書くの!!」と書くことを要求してきた。書いてある内容が重要であることを理解していると感じた。

また、お昼休みは支援学級のトランポリンをして過ごすことが多い。1月の様子を踏まえて一人でチャイムに気づいて移動できるか練習を始めた。完ぺきではないが、自分で確認して移動できるようになってきている。

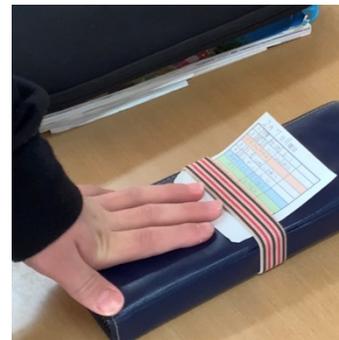


写真4.スケジュール

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

>何がうまくいったのか?人に伝えたいエピソード

エピソード「せんせ、してちょうだい」

学習の終わりのリラックスタイムで自らiPadを手にとれるようにしている。iPadにロックをかけているので、自分から「せんせ、してちょうだい」(ロックを解除して)と声をかけてくるようになった。伝えると自分のやりたいことができる経験が積み重なってきたので、要求してくる際にわざと、私が「今はできません」と断る場面を何度か設定した。その時は諦めて違うことをして過ごすこともあったが、「せんせ、してちょうだい」と要求を繰り返して意思表示ができるようになった。中学の進学に向けて、中学校の先生が支援学級の様子を見学されることがあった。その時も「せんせ、してちょうだい」と要求してきたので、「今はお話中なので、待ってて。」と伝えると、初対面の中学校の先生に「せんせ、してちょうだい」と要求していた。

エピソード「6じかんめ、さほんたま」

学習を頑張ったあとに、シャボン玉遊びをしていた。お気に入りの遊びであるが夢中になって遊んでいてもおしまいと伝えると、切り替えることができる。そのことをたくさんほめ、「また、やろうね」と伝えた。次の日「6時間目なにしようかな」と私がつぶやいたとき、急に立ち上がり、黒板に貼っているスケジュールボードに「6じかんめ さほんたま」と書いた。(写真5)

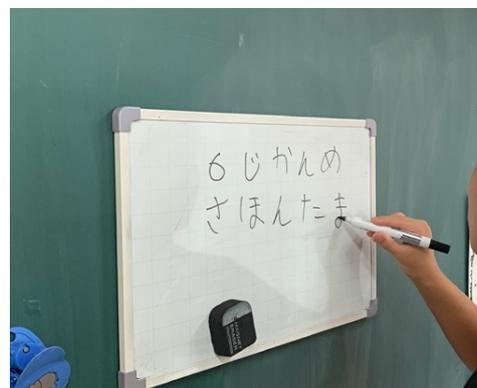


写真5.さほんたま

>うまくいった理由とICTの役割

周りとの関わりを持ちにくい本児にとってICTを介することで、自分の経験や得意なことを周りに伝える、つながりを持ちやすくすることができた。また、このような成功体験を積むことで、スケジュールの要求など自分の行動にとって必要なものの要求も出せたのではないかと。

>うまくいかなかった事とその理由

iPadで文字入力ができる力、視覚優位な点を活用し、DropStepを介してやりとりを行なった。しかし、まだハードルが高い活動であった。こちらがキャラクターの画像を送ると、その画像の名前を返信することができたが、それを本児がもっとやってみたいと思える活動には至らなかった。

>ICT を使わなかったらどうだったか

当初は iPad を使ってスケジュールの確認を行うことにしていたが、本児が iPad を使いこなしているのに、他の機能に目が行きがちになり、紙のスケジュールへ方向転換した。必ずしも ICT が万能な道具ではなく、適宜使い分けが重要であることが再認識できた。紙のスケジュールだと、注目すべきものが決まっており、視覚優位な本児には有効だと感じた。

・エビデンス(具体的数値など)

本児の変容より

○自分のやりたいこと、やってほしいことを言葉や行動で意思表示することで、やりたいことができる経験を積み重ねることができた

○一人でスケジュールの確認、一人で移動するための手段の構築の一步につなげることができた

・その他エピソード

Apple Watch をリラックスタイムや iPad でお気に入り動画を視聴する際に装着している。タイマー機能で「おしまい」→「片付け」の切り替えに使っている。腕時計をつけた経験がなく、違和感がある様子であったが、「かっこいいね!」と言われるとつけたと思うようである。途中からタイマーでなく、リマインダの機能を使うことにした。リマインダだと、文字が画面に表示されるので、次の行動を視覚に訴えることもでき便利であった。現在は、支援学級の中でのみ使用中である。

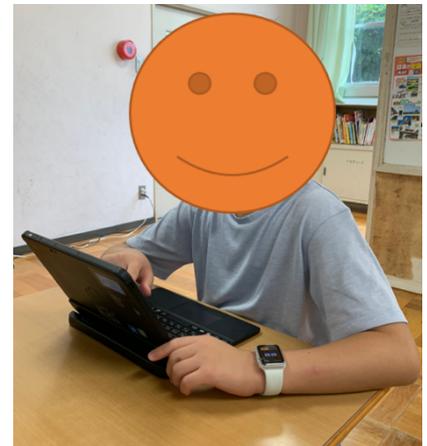


写真 6.
Apple Watch 使用中